

議團は楠社參詣に向へりとの急報に接したる相生橋署にては東西及び正門に各二十名の巡查を配置し、警戒の手配りを了し谷口警部は早速署員の出勤を命じ置き單身、職工を辛くも喰止め聲を喰して制止しつゝ一同に對して「委員三十名を選び代表して參拜する事は許すが一同境内に入る事はならぬ」と斷然中渡せる折柄、突然同警部は背後にありし何者かの爲めに脚を蹴られ轉倒せしを見たる職工は雪崩打ちて場内へ流れ入り、解散を命ぜられつゝも祈禱文を読み上げ間もなく無事解散したるが、正門突破の際職工側にも背後より押出されて石段に躓ける機械工村岡清定(二六)製罐工安樂純武(一八)船殼部木原平一(二二)の三名は踏倒されて安樂、村岡の兩名は一時人事不省に陥り、木原は餘程の重傷にて縣立病院に昇ぎ込まれたり。

川崎造船所は二十五日の始業以來第二日は就業者千餘名を増し第三日は二千餘名、第四日は八百名を増したるに拘らず第五日は却つて百十三名を減じたり。之に就きて會社側は當日「今後就業者が餘りに澤山減じた場合は再び工場を閉鎖するかも知れないが今の所此上減じるやうな事は無からうと思ふから閉鎖はせず此の儘で續ける考へである」と語れり

## 十、幹部總檢舉

斯くして數旬に亘る神戸争議は勞資双方とも態度頗る強硬、全く解決の曙光を發見し得ず。労働者

側の指揮者にも如何にして此争議の局を結ぶべしとの方策のあるなしと雖も、神戸争議が我國に於ける勞資の決定的戰場となりしに鑑み、且は飽迄頑強に面目を死守せんとする會社の態度に對する労働者の本質的抗争心より、今は一步も譲る能はず、兩々相下らざるものあり。

一方天下の物情は勞資の問題に集中して決して穩かならず。東京に於ては日本労働聯盟對砲兵工廠の紛争あり、神戸に於ては車夫まで團體交渉権を要求し、官立工場なる鐵道院鷹取工場まで三菱、川崎に策應せんとし、神戸市街電鐵起つべしとの新聞記事散見する等、當局者の神經の刺戟さるゝ處尠少なざりき。

此時二十九日新開地の衝突は起れり。警官隊は決戰的争闘心理に驅られ、二百餘名の大檢束を敢行したり。二百餘名中、主事代理柴田富太郎氏以外の闘士少からざりしや勿論なり。

警察部は當初より賀川豊彦氏の統率力の偉大なるを且は羨み且は畏怖したり。白面なる賀川氏の無言の一指が一萬の職工の進退を手足の如くならしむるの妙と、幹部會の決議が末梢神經の一端まで神速且明確に傳達さるゝ争議團の機能を畏懼したり、爲に容易に手を下す能はざるものありしが、二十九日の一舉は、神戸市の治安を根抵より動搖せしめ、最早監督官廳に對しても靜止し能はざるに到れると、一は大檢束の端を開き、濡れぬ先こそその感に到れるとの兩點より、警察部の最高決定は敢然として争議團の幹部を一網打盡に檢束するの途に出でたり。午後四時警察本部は市内各署長を集め、午後